

平成27年度 英語進学科生対象「講演会」実施報告

去る1月30日（土）、英語進学科1、2年生を対象とした「講演会」が実施されました。毎年各界で活躍されている方を講師の先生としてお招きし、高校生向けに講演をいただいています。今回は、福岡県の大学で英語を教えられる那須省一先生に講演をお願いしました。

演題：『国際報道今昔』 講師：那須省一先生

1954年宮崎県西都市生まれ。1979年宮崎大学教育学部卒業後、読売新聞東京本社入社。国際部記者時代にはナイロビ（ケニア）支局、ロンドン支局で勤務。1990年には27年に及ぶ投獄から解放された直後の南アフリカの反アパルトヘイト（人種隔離政策）闘争の伝説的指導者、ネルソン・マンデラ氏に単独会見した。英字紙デイリー・ヨミウリ（今のジャパン・ニュース）の編集長、西部本社（福岡）の編集委員を経て2010年春、早期退社。その後、2010年夏から2012年秋にかけ、アフリカ、アメリカ、英国をそれぞれ約半年再訪、その取材成果は『ブラックアフリカをさるく』や『イギリス文学紀行』などの本として刊行。現在は福岡市に住み、大学の英語非常勤講師を主な仕事としている。昨年秋から韓国語の独学に取り組んでおり、今春から韓国を取材する旅を開始する予定。



【生徒の感想文より】 ～発言することの勇気～ 英語進学科2年 Y. K,

今年の講演もたくさんの刺激を受け、楽しい時間が過ごせました。那須先生が西都市出身ということで、勝手に親近感を持って話を聞いていました。

先生が言っていたように、日本人は英語を話すことに抵抗を持っていると思います。シンガポールへの修学旅行で、自分から積極的に話しかけることの難しさを知りました。自分に足りないのは「発言する勇気」だと感じました。

私も韓国語を独学で勉強しているので、先生が発する韓国語が聞き取れてうれしかったです。講演の冒頭の先生のあいさつ「アンニョンハセヨ」に対し、英語進学科のほとんどの生徒が返事をしたので、第二外国語の学習が役に立っていると感じました。

先生は春から韓国に渡って現地の英語教育を取材したいと言っていました。私の韓国人の知人も英語がペラペラなので、韓国の教育事情にはとても興味があります。

60を超えて新たなことに挑戦し続ける先生を見て、高校生の私たちは限界を決めず、もっともっと挑戦しなければと感じました。

【那須省一先生のブログより】

ファイティ＝頑張って！

先週末、宮崎に戻った。縁あって宮崎日大高校で英語進学科の一二年生に話をさせてもらった。高校生に講演をするのは随分久しぶり。彼らの若い感性にどれだけ響く話ができただ心もとないが、楽しいひとときを過ごさせて頂いた。

「国際報道今昔」と題して、アフリカ特派員だった頃のことを中心に振り返った。ネットやスマートフォンなど昔と比べれば信じ難いほどの技術革新の時代に生きていても、メディアの核心は新聞にあると思っている。日々の紙面に時代を象徴する言葉があり、そうした刺激が脳細胞を活性化する。できる限り、実際の紙面を手にとって記事をじっくりと読み、思いを馳せるようにして欲しいと訴えたつもりだが、はてさて真意は伝わったかどうか。

嬉しかったのは、私が今独学に励んでいる韓国語の話題を振った時、彼らが予想以上の反応を示したことだった。私は冒頭思いつくままに「アンニョンハセヨ！」と壇上から呼びかけた。すると、多くの生徒が間髪を入れず、「アンニョンハセヨ！」と返してきたのだ。え、何で！何でそんなにスムーズに返答するの？と私は少し面食らった。それで思い出した。前夜に今回の講演会を企画して頂いたK先生、T先生と歓談していて、宮崎日大高校では韓国語と中国語を第二外国語として学んでいると聞いていたことを。

高校の段階からアジアの隣国の言語を学ぶとはすばらしい。私の高校時代には考えられないことだ。卒業後もこのまま学習し続ければ、隣国の言葉の達人となれる可能性大だ。欧米の言語と異なり、韓国語や中国語は日本語と共通の土壌がある。

やがて韓国を歩く旅に出る予定であることも講演の中で語った。講演の最後に女生徒の一人が「韓国を旅する目的は何ですか？」と尋ねてくれた。幾つか心に秘めている目的はあるが、その一つは韓国で今どのような英語教育が実施されているのかを見てみたいことだと答えた。韓国人の方が日本人よりも英語が上手だと言われている。母音や連音など音韻的な要素も関係していると思うが、彼らの積極的な「国民性」も一因しているのかもしれない。彼らはとにかくしゃべる、ミスを怖れない、そんなところが関係しているのではないか。

講演の中でちょっとした質問をすると、手を挙げて答えることはせずとも、頭に浮かんだ答えを口にする生徒も少なくなかった。そういう姿勢を私はとてもいいと思う。まず、とにかく口にしてみる。それが正答であろうと誤答であろうと構わない。口にすることでコミットする。それによって何かで自分の中で動く、動き出す。口にしなければ、何も動き出さない。語学の学習はそれが基本だと私は思っている。黙読も良いが、語学の勉強には精力的な音読が欠かせないと思う。初めて出合った語は声に出し、手を動かし（書く）、耳で確認して初めて、身の内に宿るのではないか。何度も何度も繰り返して。

ネルソン・マンデラ氏との単独会見のテープとか米英文学紀行の旅のこぼれ話とか聞いてもらいたいことは多々あったが、時間の制約ゆえにごく限られたことしか話せなかった。最後に私の好きなことわざ、Practice makes perfect. (習うより慣れる) と、さらに語学学習の要諦とも言える、To err is human, to forgive divine. (過つは人の常、許すは神の心) という金言を紹介した。語学の勉強でミスをおかすのは当たり前。間違いを恥ずかしく思うことなかれ。여러분 (ヨロブン) 감사 합니다 (カムサハムニダ) 그리고 (クリゴ) 화이팅! (ファイティ!) [皆さん、ありがとうございました。そして頑張って!]

那須先生、ご多忙の中、貴重なお話をありがとうございました。